

ESSAY いたずら

倉元信行

①

鑑 定 団

ガラスは広い分類でセラミックスの中に入れられたり、「ガラスとセラミックス」というように並べて書かれたりする仲間同士である。

私が初めてローマングラスという不思議なガラスに出会ったのは、1991年の秋のことである。妻と出かけた横浜のそごう美術館でその展覧会が開かれていた。

照明を落とした暗い会場で、小さなスポットライトに浮かび上がるそれらのガラスは、金、銀、虹色。この世に在るありとあらゆる美しい光をすべて集めたごとく妖しげに輝いていた。

ため息の出るような光と影であった。

説明によると、二千年ほど前、ローマ時代に作られたガラスが、シリアを中心とする砂漠の中に長い年月埋もれて、このように変化したものだという。

その翌年の1月、ヨーロッパ出張に出かけた時のこと。

フランクフルトの骨董屋の片隅に一個だけよこんと置かれているローマングラスを発見した。あの展覧会を見ていたから気がついたのである。

すぐにケースから出してもらった。ときどきしながら右手でそっと持ち上げてみた。

驚くほど軽い。傾けて底を見ると縁に沿って鮮やかな虹色が走っている。

側面の半分ほどは未だ土を被っていた。

この土の下には一体どんな光が隠されているのだろうか。そんな想像力をかきたてられる。

見ると直径8センチ程のこの小さな壺形のガラスに、日本円で約60万円という値札が付いている。こんな値の張るものはもちろん焼きものでも買ったことがない。

あの展覧会の時、売り物でないのに、一つ選ぶとすればどれにするだろうか。とか、こんなものを手にすることは一生無いだろうなと考えたりしたことを思い出した。

心の中でいつかは手にいれたいと思っていたものである。

でもまさかこんなに早く巡り会うとは思ってもしなかった。

買うことに決めた。が、一応値

切ってみた。親切な女定員は、店を留守にしていたコーナーに電話を入れてくれた。

「これは10年前に買った値段をそのまま付けて、つい先日店に出したものでまげられないそうです」。

私は納得してカードを取り出した。

帰国してさっそく表面の土をシャープペンの先で少しずつ丁寧に剥いでいった。パリッとめくられて現れた器肌は、あの展覧会の時息を呑んだ輝きを放っていた。

この輝きの秘密を知りたいと思った。作られた時には普通の透明ガラスだったはずのものが、どうして土に埋もれている間に「銀化」現象と呼ばれるこのようなきらめきを見せるようになるのか。どんな解説書にも化学変化とか、風化としか書かれていない。

この剥ぎ取ったかけらを電子顕微鏡で覗いて見ることにした。

そこに現れた像は、厚さが約1ミクロン(1000分の1ミリ)という、薄くて均一な層が無数に積み重なったものであった。そして全体の様子は、あの海にある千畳敷とよばれる侵食された海岸のようだった。

なぞは解けた。物理の世界の「回折格子」(かいせつこうし)だった。この可視光線の波長に近い厚さの層の積み重なりが、光を回折している。いろんな色のスペクトルを紡ぎだしていたのである。

でも疑問は残る。砂漠に埋もれている間になぜこういう構造になっていたのかという疑問が。

想像だが、ガラスはアルカリ分を含むので、これが酸性の強い砂漠の土の中でだんだん侵食されていった。そして強く侵食されたところが周期的にできた。

それが層と層の隙間に当たるところである。シャープペンでパリッとめくられたのがこの層間に当たるとだ。

でも、この層の周期が木の年輪のように季節(気温)の繰り返しでできたのか、ほかの理由なのかは分からない。

それにしても、層の厚さが目に見える光の波長に近い1ミクロンだったから、この輝きは生まれた。

それよりも厚くても薄くても、発掘品はただ侵食されただけの白っぽいガラスだったはずである。

人工物であるガラスと自然とが作り上げた不思議な偶然である。

数年前、セラミックス関係の雑誌の編集委員をしていた時、このローマングラスを特集してみたいと考えたことがある。

「古代オリエントガラスの美と科学」という仮題を付け、「古代ガラスの発祥と歴史」、「ローマングラスの美について」、「発色の原因と侵食のメカニズム」などにまとめられないかと考えた。

企画を実現しようと、池袋にある古代オリエント博物館を訪れた。

オリエント専門館は日本でここ岡山のオリエント

美術館くらいのものである。

前もって送っておいいたこの企画の概要を説明すると、その学芸員の方は、歴史や文化のことなら書けるが、科学の所を書ける人は思い当たらないと言う。

私が顕微鏡で覗いた写真を見せて説明すると、「あなたが書かれたらどうですか」と言われてしまった。

この一言で企画は挫折した。

相当の骨董好きでもローマングラスを手にとった事のある人はそういないだろう。

この宝ものを見た人は興味深げに、「鑑定団」に出して見たらとけしかける。

